# 1

「委員長、下がってて。」
　人通りのない路地裏で、勇太を追って来たエンジェモンと
委員長の間に勇太が立ち塞がる。
（遂に掴んだ！光への手がかり…！こいつを絶対に逃がす訳にはいけない！）
「…の君」
（…今までは、回復フロッピーやヴォ―ボモン達が居てくれた。
　本当にひとりで命を掛けるのって初めてか…？
　こいつを口を聞けるくらいに手加減して倒せるのか？
　いっそわざと捕まって内情を知るのは…。）
「日野君！」
「！…うん？」
「うん？じゃなかと!?
　…いや、す～っ、そんな状況じゃないわよね。
　一つだけ聞かせて、大丈夫なのよね？」
（…流石、委員長。
　俺が初めにデジモンに遭った時は、散々パニくったのに。
これなら、先のプランも…。）

## 2

　しかし、勇太が一瞬冷静になったその時、服を掴む茜の手が震えているのが伝わった。
「…。」
(…俺は、馬鹿か。)
　勇太は、自分の顔面を殴った。
「なっ!?何しよーと!?」
「ふはっ、あの気持ち悪いルクスモンが執着するだけあってその相手も大分イカれてるみたいですね。」
「…ごめん。
　目を覚まそうと思って。」
「はぁ!?」
( そうだよな…ヴォ―ボモンが、隣にいたらこんな馬鹿な事考えてたら殴られるよな。
　俺達がやる事は目の前の人を…笑顔を守り抜く事。)
　勇太が、茜に振り向き笑いかける。
「大丈夫。
　委員長は、俺が必ず守るよ。」
「っあっ！当たり前ったい！こっちは巻き込まれただけったい！」
「ふふ…まるで勝つ前提みたいですね。」
( さて、どうする？
 相手は成熟期…フェアリモンの脚ならダメージは通るし、倒せるとこまでいける。
　見てきた天使型と同じで、こっちの事舐め腐ってる…ゲートが開いた後は、少し緊張が見えたけどまだ無防備な雰囲気だ。
　…問題はこの空間。
　デジモンが MW でも動けるようにだろうけど、解除はあいつを倒したら自動でされるのか？
　周囲は…。)
　勇太がフェアリモンの脚で風を起こし周囲の状況を感触で探る。
(100m圏内に、生物は…いない。
　大通りも範囲に入ってるけど…先は、隔離途中とかだったのか？)
「…いや、やめだ、やめ。」
「？」
「元々小難しいのは苦手なんだ。
　だから…何も考えないでとりあえずお前を倒す。」
　その言葉にエンジェモンは、満面の笑みを浮かべた。
「人間は、ギャグだけそこそこのようですね。」
　その言葉を契機にふたりがぶつかる。

## 3

「ぬっ!?」
　エンジェモンの拳と勇太の蹴りがぶつかり合い、双方吹き飛ばされる。
　勇太は壁に叩き着けられ、エンジェモンは警戒してか、追撃せず、上空に逃げる。
「日野君！」
「もーまんたい！全然余裕。」
（上空か！）
　勇太が風を起こし、石をエンジェモンに向けて吹き飛ばす。
「！」
　安全圏に逃げたのをノーモーションで手札にないと思われた遠距離攻撃を加えられ、エンジェモンは焦ったのかヘブンズナックルで破壊してしまう。
（これは…！）
　勇太が、風を巻き上げ、上空に昇る。
　それに合わせてエンジェモンが下降し、ヘブンズナックルで殴り掛かるが、勇太が身体を捻り躱す。
（やっぱりそうだ…！）
　勇太がカウンターで蹴りを入れるが、エンジェモンは再び上昇して躱す。
　それ以降エンジェモンは、警戒して隙を見つけた時にしか攻撃に降りてこず、勇太は場所を移動せず攻撃を誘う膠着状態になった。
（やっぱり、降りてこないか。
　あの高さまでは、流石に風を溜めて昇るのに時間が掛かる。…だが、もう十分な筈！）
　下降して来たエンジェモンの攻撃を躱し、助走を付け勇太が飛び蹴りを放つ。
　それ自体は躱され、勇太は後方のビルの中に突っ込む。
（出てこない…誘っているな…こちらが優勢になって油断していると…ビルの狭い中なら逃げられないと踏んだのでしょうが！）
　エンジェモンがビルの中に突入する。

# 4

「あ～も～！日野くん、あげなとこまで行って！」
（追いかけたほうがよかと？でも、絶対足手まといになるっちゃん…！）
「だ～もう!!!」
「ねえねえ困ってる？それに君ってもしかしてワタシのパートナー？」
「へ？」
　ゲートの開いた位置に何かがいた。
　それが茜に話しかけてきた。

## 5

同時刻、DW のノーマル。
今、ゲートを開き回収したデジヴァイスを勇太に届け、デーモンと勇太と叶達の戦闘時に、アンティラモンに手を貸したフードのデジモンがいた。
( これが、今の我々に出来る精一杯の助力だ。
シオンのゲートは完全に閉じて、外部からは完全に隔離されてしまった。
MW も同様にゲートが殆ど閉じてしまっている…成長期のデジモンひとり送るのが精一杯か。
…あの子は、様々な状況への適応能力が高い。
良いテイマーと出会えば必ず力になってくれるだろう。)
フードが風に靡き捲れ、中から黄金の兜を被ったデジモン、マグナモンの顔が現れた。

## 6

　ビル内部の廊下侵入した奥に勇太は陣取った。
　エンジェモンが突っ込んで来、拳を構える。
（やっぱり、予想通りだ。
ヘブンズナックルがビームの様に伸びてこない。
デジモンの個性なのか、こいつのヘブンズナックルは完全に近距離型。
　いける…勝負だ…！）
（人間が…！この狭い廊下の一本道なら勝負になると踏んでるんでしょうが…そもそもの身体能力に差がありすぎるんですよ！
　純粋な討ち合いで勝てる筈ないでしょうが！）
　突っ込んで来るエンジェモンに併せて勇太も走って向かって行く。
（やはり、私が拳を叩き込む方が速い！捕獲出来ないのは残念だが！ここで殺す!!!）
　しかし、エンジェモンが殴った筈の勇太は風のように霧散し、消えてしまう。
（しまった！風のレンズか…！だが、まだ回避できる！）
「無駄だ。」
「!?」
　エンジェモンの身体が動かない。
「空気の比率を調整した。
　DW の時は周囲が開けてる場所ばっかり出来なかったけど、この狭い空間なら…今、お前のいる位置は酸素比率…100% だ!!」
「しまっ!!」

# 7

　勇太が飛び上がり、風をドリル状にして脚に纏わせる。
「たあああああああ!!!!!!!!」
　エンジェモンの顔面に向け風のドリルがえぐり取るように回転する。
「や…やめ!!!!!があああああああああああああああ!!!!!!！」
　遂に、エンジェモンの兜を叩き割り蹴りを叩き込む。
　エンジェモンはそのまま、窓際の壁に叩き着けられ項垂れる。
「はぁはぁ…勝った。」
（空気の比率変えるのが効くかは賭けだったけど上手くいった…。）

## 8

「日野君！」
　廊下の奥から茜の声が聞こえた。
「委員長、来ちゃあぶ…。」
　振り向いた瞬間、何故茜が叫んでいたのか勇太は理解した。
　吹き飛ばされたエンジェモンが勇太の後方に凄まじい形相で迫っていた。
（やっぱり、あの一撃だけじゃ…甘かったか！）
「ヴォ―…あっ。」
　勇太自身にも付け入る隙はあった。
　それも致命的な。
　常にパートナーと一緒であり、戦闘終了の気の緩みからの奇襲にいつもの調子でヴォ―ボモンに追撃させようとしてしまった。

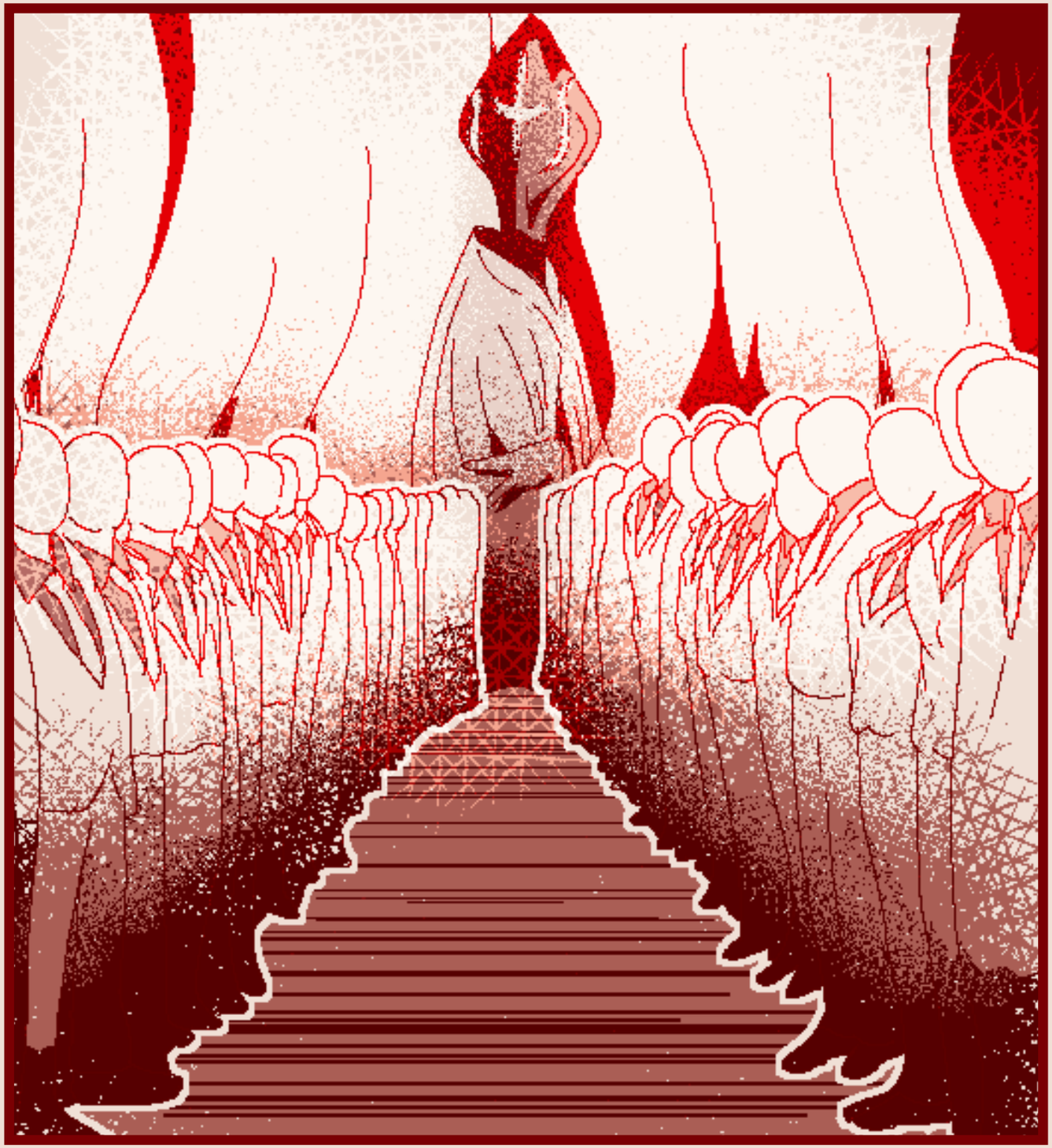
## 9

「がっ！」
　エンジェモンは自身に起こった事が理解できなかった。
　動こうにも身体が動かない。
　しかも体が痺れる。
　酸素の比率変更で起こる立ち眩みとも違う、完全に固定されている感触。
（日野 勇太ではない。
　これは…！）
　顔を上げ、原因であろう人間に目を向ける。
「っ！」
　そこには、茜と羊型のデジモンがいた。
（馬鹿な！デジモン!?今、ゲートから我々以外のデジモンが!?
　いや、あのデジヴァイスも含めて偶然じゃなく何者かの干渉があったのか!?）
　周囲を見ると電気状の糸がエンジェモンを絡め取っていた。
「だが!!!!!!」
　エンジェモンが動こうとすることで周囲の糸が切れ始める。
「勇太さん！ワタシのビリビリネットは、そこまで強度はありません！
　トドメを！」

「ふぅ…、1、2、3。」
　勇太が混沌とした状況をカウントダウンをし、思考を敵を倒す事だけにリセットする。
「…イダー…キック。」
　脚に風を纏わせ、振り向くように回転しながら蹴りを入れる。
「はぁ!!!!!」
　切り裂くようにエンジェモンを蹴り抜ける。
「がああああああ!!!」
　その一撃に遂に力尽きエンジェモンがデータになって霧散していく。
「死んだの…？」
「…。」
「このままデジタマに戻るから死ぬってよりは生まれ変わるって感じかな？」
　周囲の空間から電子データが剥がれるように光が溢れ出した。
「空間が戻る…急いで逃げよう。
　人に見つかったら面倒だ。」
「あっきゃ！」
　勇太が茜達を抱え外に逃げる。

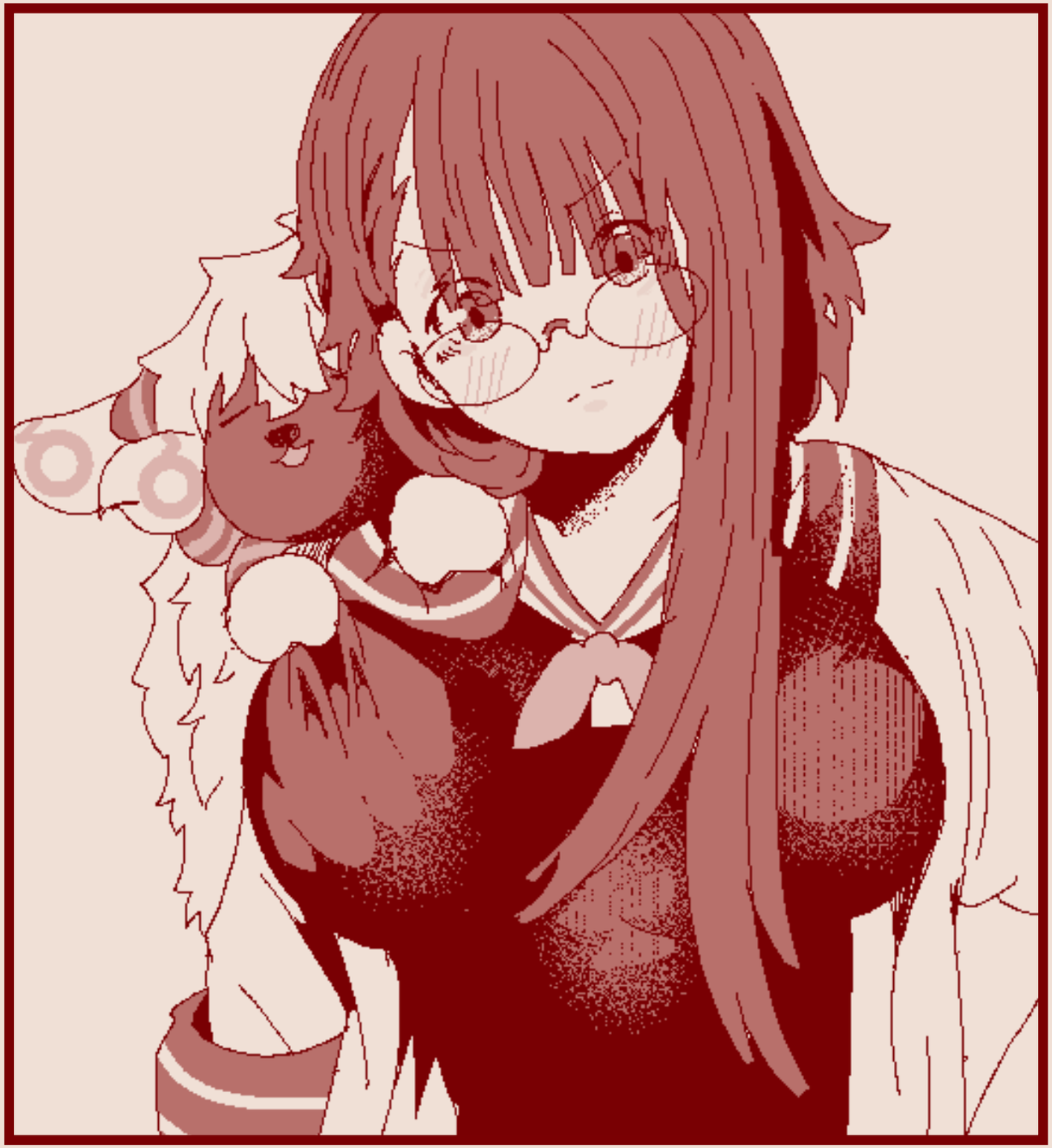
# 11

「はぁ…正直信じられないけど…あのエンジェモン？とこの子見るとね…。」
　事が終わり、一息吐くのも兼ねて3人は飲み物を飲みながら、勇太がこれまでの経緯を茜に説明した。
「で？君は？」
「ワタシ？ワタシ、エレプモン！
　ロイヤルナイツ…あ～勇太さん達のいたサーバーのケルビモンさん達のような守護者？のデジモン達のひとりのマグナモン様に言われて、勇太さん達を助けるために来たんだ！
いや～すぐパートナーに会えるなんて良かったよ！
　しかも、茜優しそうだし！」
　そう言うとエレプモンは茜に甘えるように顔を擦りつけた。
「すごか甘えん坊な子やね…、日野くんとこの子もそうなん？」
「ヴォ―ボモンは…ちょっとそうかも。」
　勇太はヴォ―ボモンを思い出し、微笑んだ。
「…。」
「それで、あのカルト教団？ってなんなの？」



## 12

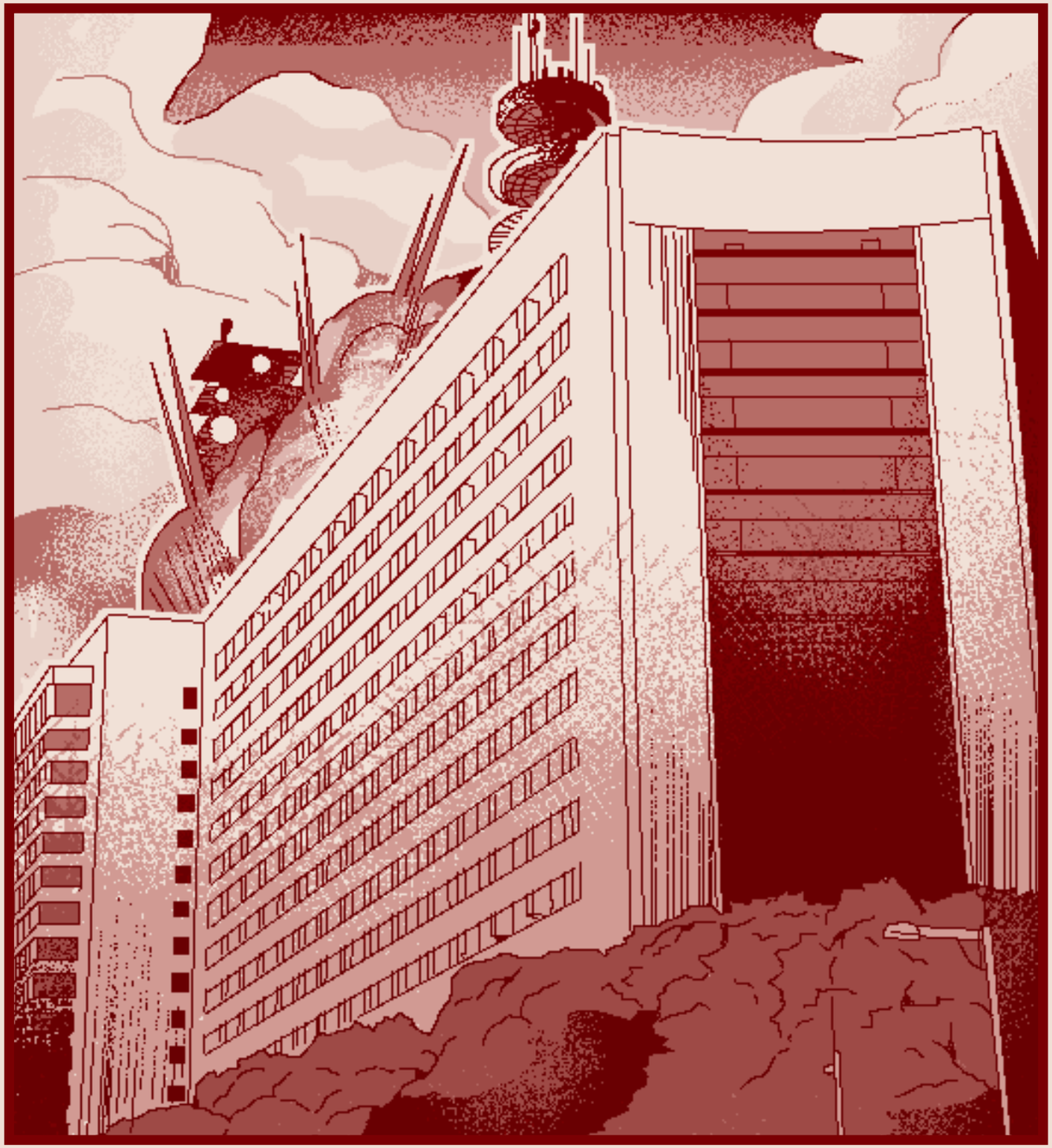
「ん？あぁ、そうやね。
　あのカルト教団…The Elect of Zion( ジ・エレクト・オブ・ザイオン ) 言って。
ここ数年で勢力伸ばしてるキリスト系のカルト宗教って言われてるみたいで。
　エリート層を中心に、選民思考が強い団体。
　終末が近いから選ばれた人間だけが天国行けるんだ〜って感じの。
　幹部？なのか分かんないけど、ネットとかで対談とかで絡みに来るデジチューバとかと話しても揚げ足取りとかも上手く躱してそのデジチューバーも入信させちゃったりして、なんか教義とかも良く出来てるたしくてそこがエリート層に受けてるんだって。
　献金とか変な活動とかは、そこまで言われないけど、囲い込みが酷いって事で有名みたいなのよ。
　信者の家族が気付いたらいなくなってて、教団に拉致されたんじゃないかって噂で言われてるみたいなのよ。
…って聞いてる？」
「…すんません馬鹿で…あんまし、分かりませんでした。」
「もぉ〜。」
　それからしばらく掛けて噛み砕いて茜は勇太に説明した。
　勇太は、怒られてるなと思っていたが、茜はどこか楽しそうであった。



## 13

「…つまりヤバい団体と…。」
「そうだけど、その纏め方凄い馬鹿っぽいよ？」
「うぐ…。」
「でも、ならなおさら、そんな奴らとやり合うのに委員長達巻き込めないよ。
　エレプモンもいるし、今ならまだ…。」
　その言葉に、茜はムッとした表情になった。
「何言いよーと⁉ そげなん、『はい、そうですか。』って言うと思っとーと⁉
　そりゃ、鬼塚さんとそこまで仲よかってわけやなかけど…むしろ向こうは、うるさかって嫌いと思っとーかもしれんけど！
　そげん頑張っとー子ば、ほっとくほど器の小さか女やなかよ！
　それに！日野君も!!!」
「へっ？」
「水くさか！小２からの付き合いやろ！」
「で…でも、迷惑掛かるんじゃ…。」
「もう掛かっとーよ！
　それに！悪いのはそいつらなんやろ⁉
　それやのに、こっちがビクビクしとーとか！腹立つったらなかばい！
　一発、文句も言わんで帰ったら、そいこそお母さんたちに『何しよーと！』って怒られるったい！」
「ワタシは元々そのつもりで来たし、ふたりもなんか面白くて好きだし付き合うよ～。」
「…ごめん。」
「ちがうっちゃ！」
　茜は自身満々に微笑む。
「ありがとうやろ？」
「…うん。」

　倒したエンジェモンが他と連絡を取っていないとも限らない。
　そう考えた2人はひとまずそれぞれの家に異変がないか様子を見に行くことにした。
　電車に揺られ、最初は話していた勇太達であったが、張りつめていた糸が切れたのか途中で寝てしまい茜の肩にもたれかかって寝てしまった。
（義理だけやなかよ…。
　肩…日野くんの匂い…。
　好きな人が困っとーっちゃけん…。
　もしかしたら、これで付き合ったりとか…。）
「光…。」
　勇太が寝言でぼそりと呟く。
「…。」





勇太達が電車に揺られている同時刻。

東富士演習場で演習中であった爆装した自衛隊機、AH-64D が何者かに火器管制を乗っ取られ、ヘルファイアによる対地射撃で警視庁本部庁舎の一部を破壊した。

当時、大規模な回線の不調により衛星電話により NSC まで情報がいったが警視庁には連絡が入らず、迎撃命令まで下ったがアプローチは間に合わず、多くの死傷者が出た。

対地射撃後、AH-64D は即座に警視庁本部前に着陸。

しかし、パイロット達は死亡していた。

死亡時刻は…東富士演習場での演習中の時刻であった。